

1997年12月11日 公開講演会要旨

## エチオピア教会の宗教画と彫像

—文字を知らない人びとへの信仰の伝達—

講師 ニール W. ソベイニア氏  
(ホープ・カレッヂ教授、歴史学)

加山 久夫

ソベイニア先生というと、本学の教職員・学生の多くは、ホープ・カレッヂの国際交流の先生としてよくご存知であり、実際にお世話にもなってきました。しかし、先生がどのような専門分野の方であるのか、案外知られていないの

ではないでしょうか。

昨年12月に京都で開かれた国際アフリカ学会に出席されるこのことを伺いましたので、それに先立って、先生をお招きし、国際交流センターとの共催で、上記テーマによりご講演いただきました。先生は特にエチオピアの歴史や文化の研究者として、自らエチオピア語を使ってしばしば現地を訪ね、研究してこられたエチオピアの宗教芸術について、スライドをとおして興味深い話をして下さいました。

エチオピア人がキリスト教に入信したことはすでに新約聖書に伝えられているが、本格的に布教され、キリスト教が広がったのは4世紀以降。すでにその頃から、エチオピア教会独特の、正面がやや円みをおびた教会建築が定着しはじめ、その内側に壁画が制作された。それらはその後、文字を読めない人々のために信仰を伝えるのに大きく寄与してきた。他方、司祭や修道士たちは、聖書の写本に絵を挿入するとともに、盛んにイコンを作成した。大きいイコンは祝祭日の行進の先頭に掲げられ、小さいものはペンダントなどとして身につけられる。イコン制作は15世紀以降盛んになり、その用途も、旅行の際の魔よけ用など多目的化する。

しかし、16世紀以降、そして近代に至ってはますます、ヨーロッパの影響を受けるようになった。また、公教育が少しずつ普及するとともに、そこで教育を受けたイ

コン画家たちは徐々に伝統的な表現様式を変えてきた。伝統的な題材として、新約聖書に関わるもの、聖母マリヤ、エチオピア教会の聖人たちが主要なものであり、人物描写については、目と手（長い指）にアクセントが置かれてきた。画家たちはそれらを神のために描くのであり、ほとんどの場合署名することはなかった。しかし、これらが最近では徐々に変わってきたのである。

しかし、現代のエチオピア教会はこれらの外からの影響を受けつつ、これまでのようにただ伝統を守ろうとするのではなく、自らの手で新しい伝統を創造しようとしてつつある。1500年の伝統の現代的表現をイコン画家たちは意欲的に追求しようとしているのである。

（かやま ひさお

所長、一般教育部教授）